

ナーへ無事帰り着いたところで終わっている。チェンマイ出発後、タイの平地から山岳へ分け入り、うっそうと茂る森林地帯をかき分け、山腹に点在するカレン人村落をいくつも経て苦心惨憺の末、タイ・ビルマ国境を突破するくだりは、さすがに体験に基づいているだけに文章もイキイキとしていて、正に本書の圧巻だといつてよい。

著者は、ボウ・ネーウィン（現ビルマ革命評議会議長ネーウィン将軍）の率いる第2班（ビルマ国内での後方攪乱担当）所属の将校で、アウンサン将軍が率いる作戦司令部（第3班）、ボウ・チャーゾー、ボウ・ジンヨー等の第1班（正規軍）のビルマ進撃に呼応して蜂起したわけである。

「三十人の志士」達は、ビルマ独立後バラバラになった。ボウ・レチャーのように実業界に入ったもの、ボウ・イェートゥッのように共産党に入党、地下活動に転じたもの、ボウ・アウンサンのように暗殺されたもの等、流動する歴史の重さをヒシヒシと感じさせられる。

本書は、「南機関」の長であった鈴木敬司元陸軍少将が直接著者から進呈され、同じ南機関の高橋八郎元大尉（現ビルマ大使館 Liaison Officer）の手を経て、私に邦訳を依頼してきたものであるが、ビルマ独立軍の活動を内面から描いたものとして貴重な資料であるところから、翻訳に先だちあえて紹介の筆を執った次第である。（大野 徹）

G.B. Milner and Eugénie J.A. Henderson (eds.) *Indo-Pacific Linguistic Studies*. Part I, Historical Linguistics (xv+514p.); Part II, Descriptive Linguistics (viii+571p.), Amsterdam: North-Holland Publishing Company, 1965.

1965年1月、ロンドン大学 SOAS の主催による Conference on Linguistic Problems of the Indo-Pacific Area がロンドンで開催されたが（泉井久之助「輓近南方諸言語研究の動向」『東南アジア研究』III-2. pp. 74-参照）、本書はそのときに提出された論文をまとめたものであって、同時に出版された雑誌 *Lingua* 14, 15 (1965) と同じ内容である。Part I には historical, comparative な論文

25編、Part II には descriptive, typological, sociological なもの24編が収められている。

言語系統別にみえていくと、ムンダ語については Biligiri の Sora 語動詞研究、Zide の Proto-Munda の再構などがある。モン・クメル語では Jacob のクメル語数表現の研究などがあるが、この系統の言語を比較言語学的に考察した本格的な論文はない。チベット・ビルマ語では、Rawang 語 (Morse)、ビルマ語 (Allot) の動詞表現の研究などもっばら文法に関するものが収められ、特殊なものとして Okell の Nissaya Burmese 研究がある。逆にタイ系言語に関する論文は4編とも比較研究である。

オーストロネシア語については従来の比較研究に対する批判を述べた論文が多い。古バリ語資料の評価 (Teeuw)、Rotuma 語における同系言語からの借用要素の問題 (Biggs) など。借用要素に関してはこのほかタガログ語におけるスペイン語要素を論じたもの (Lopez) がある。オーストラリアの言語にはわれわれは直接の関心をもたないが、Wurm によるオーストラリア語の研究動向の紹介2編は役に立つ。

以上のような historico-comparative または descriptive というオーソドックスな論文のほか、類型学的比較研究 (typology) と言語と社会を扱ったものが若干収録されている。いちおう系統から離れて音韻論的特徴などによる言語地域設定の試み (Henderson)、必ずしも新たな考えではないが概念が名詞的・動詞的のいずれかによる言語の分類 (Capell)、言語と方言 (Kähler)、national language の問題 (Alisjahbana) など。

参考のため執筆者名を列挙しておく。

Anceaux (Austronesian), Allot (Burmese), Alisjahbana (Malay), Biggs (Rotuman), Buse (Rarotongan), Biligiri (Sora), Chrétien (Austronesian), Cowan (Oirata), Condominas (Mnong Gar), Constantino (Philippine), Capell (Australian), Dyen (Formosan), Elbert (Polynesian), Egerod (Atayal), Gedney (Yay), Haudricourt (Oceanic), Henderson 2編 (Khasi; SEA languages), HlaPe (Burmese), Holmer (Austronesian), Izui (Micronesian), Jones

(Thai), Jacob (Khmer), Johns (Javanese), Kuiper (Munda), Kähler (Indonesian), Luce (Danaw), Li (Kam-Sui), Lopez 2 編 (Tagalog; Philippine languages), Milke (New Guinea), Milner (Austronesian), Morse (Rawang), Nguyen-Dinh-Hoa (Vietnamese), Okell (Burmese), Pinnow (Munda), Pulleyblank (Sino-Tibetan), Roolvink (Malay), Robins (Sundanese), Shorto (Mon), Simmonds (Tai), Teeuw (Old Balinese), Thompson (Vietnamese), Uhlenbeck (Javanese), Wurm 2 編 (Australian), Zide (Munda).

(三谷 恭之)

“Thai Nooi” (pseud.) *Prasopkaan 34 pii heeng raboob prachaathipatai*. Bangkok: Prae Pittaya, 1965. 664 p.

匿名の政治評論家「タイ・ノオイ」の筆はいつになったら衰えるのか。かれの著作の数は、もう30冊になるはずだ。人民党革命の直後から、新聞編集のかたわら、政治評論の仕事をつづけ、主として Prae Pittaya 書店を発行元に、精力的に書きまくってきている。かれの生命力が長いことは、二つのことを物語る。一つは、民衆がかれの評論を支持していることである。もう一つは、「タイ・ノオイ」自身が政治の観察と政治評論の仕事に、心から情熱を燃やしていることである。しかし、かれの本名を知っているひとはあまり多くはない。それでいいのだと思う。

本書は、その「タイ・ノオイ」の最新の本である。題の意味は、民主主義時代の34年の経験と訳せよう。人民党革命後の歴史、すなわちタイの現代史を、「タイ・ノオイ」なりに捉えた本だとすると、それだけで読者の興味をひくことだろう。それともう一つ、もうそろそろタイ人の手になるそのような民主主義時代史が噴出していい頃だから、その先鞭をつける意味でも、本書の刊行は意味深い。

しかし、残念ながら、ある面では、読者は期待を裏切られることだろう。なぜなら、これは、実はかならずしも首尾一貫した歴史の本ではないからだ。この34年のあいだの重要なできごとを、エピソード的に取り上げて解説しているだけの本である。内容の迫力も、かつての力作「10人の総理大臣」にはる

かに及ばない。そして、やはり、サリットの評価はまだ遠慮しているのでは、興味が半減する。

本書は、それでもいくつかのメリットをもっている。第1のメリットは、フラー・ソン・スラデートの再評価をうながしている点である。ソンは、ピブーンに憎まれた悲運の政治家である。ピブーンによってたいへん悪いイメージを作り上げられてきた。かれがはたして、ピブーンがいうほど悪人であったか、そして、人民党内序列第2位という実力、人民党革命の作戦担当者としての功績などは、改めて高く評価されねばならないのではないか。ピブーン研究の反面に見逃せない人物だけに、本書が、ソンの人となりを描きだすためにかなりのページを割いているのは貴重である。

第2のメリットは、自由タイの正確な評価を試みている点である。自由タイは、たくさんの系列にわかれた地下運動であり、ややもすると、自由タイ運動の全貌が捉えられない傾きにあった。とくに、ネート・ケーマヨティンが自伝風に自由タイ運動を描いてよく読まれたために、かれの描く自由タイ像がすべてと解される傾向も強い。本書が、X-O グループという集団に着目し、チャムカッドという人物の動きを自由タイの中心的系列として追っているのは、その点注目されねばならない。もっともこの点は、タイでは、しだいに常識化しているが、攷米のタイ研究は、まだよく掴んでいない点である。

このような問題提起に接すると、「タイ・ノオイ」がタイ政治史の生き字引といわれる事実の正しさをまざまざと感じさせられる。冒頭の、人民党革命が民主化のトレーガーとしては失敗だったということから話を始める芸当も、ただものではできないことだ。一読してけっして損はない本である。

(矢野 暢)

Guy Hunter. *South-East Asia: Race, Culture & Nation*. London: Oxford University Press, 1966. xix+190 p.

本書は、ロンドンの Institute of Race Relations があたらしくはじめた世界民族問題研究シリーズの第1弾である。著者の Guy Hunter は、イギリスでは、アフリカ問題の権威として知られているが、